

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~3人の最凶~

LEOPARD

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～3人の最凶～

### 【Zコード】

N2956BA

### 【作者名】

LEOPARD

### 【あらすじ】

己の願いを叶えるために戦い続ける戦士たちがいた。人はそれを「仮面ライダー」と呼んでいる。ある時、3人の仮面ライダーが鏡の世界に住む異形「ミラーモンスター」を相手に戦いを繰り広げていた。だがその時、彼らは小さな赤い宝石の放つ光に飲み込まれ、気が付くと見知らぬ世界に降り立っていた。そこは魔法文化が発展した世界 ミッドチルダだった。元の作者である月光丸さんの許可をもらい、自分がもう一人のオリライダーを加えたりメイク作品です。

## プロローグ1 三人の仮面ライダー（前書き）

どうもはじめまして。LEOPARDと申します。

許可を取つたとはいえ初投稿なので、とてもドキドキしています。  
ちなみにタグにもあつたように設定上ライダーは13人から15人に  
に変更されます。

では魔法少女リリカルなのはStrikers～3人の最凶～、  
始まります！

## プロローグ1 三人の仮面ライダー

「」は日本のとある町。

この一見平凡とした町の裏では“仮面ライダー”たちによる「自身の望む願いを賭けた壮絶な戦いが繰り広げられていた。

これは鏡の世界・ミラーワールドにて戦いを続いている、3人の仮面ライダーによる物語である

「全く、面倒な奴が現れたもんだ」

ミラーワールド内の廃ビルの中で1人、ミラーモンスターと戦っている戦士がいた。

サメのような意匠を持つた水色の仮面の戦士、“仮面ライダーアビス”である。

アビスは今ミラーモンスターの一匹であるヤ『』型モンスター“シアゴースト”と戦っている最中だった。

「まずはこれだな」

アビスはサメの紋章の入ったカードデッキから一枚のカードを抜き取り、左手に装備されている召喚機“アビスバイザー”に装填する。

## 『SWORD VENT』

アビスバイザーから音声が鳴ると同時にどこからか大剣アビスセイバーが飛来し、アビスの右手に収まる。

「よし、いくか

アビスセイバーを手に持ち、アビスはシアゴーストに向かつて走り出す。

「おひあつー！」

アビスはアビスセイバーでシアゴーストを連続で切りつける。

シアゴーストも負けじと腕を振りかぶつて襲い掛かるが、アビスはそれを難なく避けて、シアゴーストを蹴り飛ばす。

「増えられると面倒だ、一気に決めるか

アビスはカードデッキから別のカードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

## 『FINAL VENT』

音声が鳴り、アビスの後ろから彼の契約モンスターである“アビスラッシャー”と“アビスハンマー”的2体が出現する。

「フツー！」

アビスは高くジャンプすると、アビスラッシャーとアビスハンマーの2体が空中のアビスに向けて高压水流を纏わせ・・・

「ハアアアアアアアアアアアアアツ！－！」

もの凄いスピードで、水流を纏つたドロップキックを繰り出す。これがアビスの必殺技、“アビスダイブ”である。

動きの鈍いシアゴーストがこれを対処できるはずもなく、アビスダ  
イブを受けて爆発した。

その後、炎の中からシアゴーストの魂が小さな光となつて出現し、それをアビスラッシュヤーが吸収した。吸収し損ねたアビスハンマーは不機嫌そうに唸り声を上げていたが。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

地面に着地したアビスが一息つく。

「さて、戻るか」

現実世界に変えるべく、近くに鏡か窓ガラスがないか探すが・・・

「まだお帰りには早いんじゃないですか？」

「……」

どこからか誰かの声が聞こえ、アビスが声の下方向に振り返る。すると階段からペンギンのような意匠を持った群青色仮面の戦士、“仮面ライダー・ゴルド”が降りてきた。

「お前……今まで隠れてやがったな。なんで今頃になつて出てきた？」

「いえ、あんな虫一匹いちいち相手にするのも面倒でしてね。せならアナタに排除してもらおうと思つただけですよ」

「てめえ……」口ひだつて面倒だつての……

「ゴルドの台詞を聞いてアビスは不機嫌になるが……

「「「ウシ<sup>ウシ</sup>ウシ<sup>ウシ</sup>ウシ<sup>ウシ</sup>ウシ<sup>ウシ</sup>」」」

「「ん?」」

二人が振り返ると、その先にはシアゴーストが大量に出現していた。

「排除してもらつたつもりが、当たが外れたようですね」

「ああもひ、めんどくせえなあ！」

アビスが再びカードデッキからカードを抜き取りましたその時・

「リリかあ、祭りの場所は・・・」

声のした方向にアビスとコルドが振り返る。

そこにはロブの意匠を持つた紫色の仮面の戦士、“仮面ライダー王蛇”がいた。

「うわあ、また更にめんどくさいのが出てきやがったなあ

「あのまま戻れて様子を見ていいべきでしたね

アビスは嫌々に呟き、ロードは三分の二の行方に後悔した。

王蛇もアビスとコルドがいることに気が付く。

「あ？・・・何だ、お前らも俺を楽しませてくれるのか？」

「悪いが、お前のやることに付き合はねえよ

「アナタみたいな奴と遊ぶと、かえって危なっかしいですかからね」

アビスとゴルドはそれぞれ返事を返す。

「はつ、連れない奴らだなあ・・・」

王蛇はそつ言ひと、ゴブランの紋章の入ったカードテックからカードを抜き取り、どこからか取り出したゴブランのような杖型の召喚機“ベノバイザー”に装填する。

## 『SWORD VENT』

音声が鳴り、王蛇の右手にベノサー・ベルが飛来する。王蛇はそれを左手に持ち替える。

「イライラするんだよ・・・」

王蛇は首の骨を「キキキキ」と鳴らし、シアゴーストの大群に突っ込んでいく。

「あへ、本当にめんどくせつー。」

アビスもまたアビスセイバーを手に持つてシアゴーストの大群に突っ込んでいく。

「私はこのまま黙つて観戦・・・わせてくれないようですね」

「ウッヘルヘルヘルヘルヘルヘル」

気がつけばゴルドの周りにも何体かシアゴーストが迫っていた。

ゴルドはペンギンの紋章が入ったカードデッキからカードを抜き取

り、今まで手にしていた大きな槍型の召喚機“スノウバイザー”に装填する。

## 『SWORD VENT』

音声が鳴ると、上空からペンギンの翼を模した2本の大剣スノウセイバーが飛来し、コルドの両手に収まる。

「永久に氷の中で眠るがいい」

そういうつてコルドも迫っていたシアゴーストに向けてスノウセイバーを振るひ。

しかし3人は気付いていなかつた。

自分達が戦っている戦場の中に、小さな赤い宝石が転がり落ちていることに

## プロローグ1 三人の仮面ライダー（後書き）

はい。とこ'うわけで一つ目のプロローグでした。

ちなみにオリライダーの「ルード」の名前の由来は「OOLD（冷たい・冷酷）」から来てます。

詳細は次のプロローグが終わったらキャラ設定を載せますので、そこに書きます。

では感想などをお待ちしています。

## プロローグ2 異世界（前書き）

プロローグ2投稿しました。

ちなみに何故ペンギンをモデルにしたかといつと、それしかいいデザインが思い浮かばなかつたからですw

## プロローグ2 異世界

アビスとゴルドがシアゴーストの大群と対峙する中、王蛇も乱入し、戦いはさらに激化していく。

「ハツハア！！」

王蛇はベノサーべルを振るい、シアゴーストを次々と吹き飛ばし、なぎ倒していく。

「うわあ、あの虫共が次々と・・・まあ、奴が数を減らしてくれるなら都合が良いな」

アビスもアビスセイバーを振るい、迫り来るシアゴーストを一體ずつ確実に倒していく。

ゴルドもまたスノウセイバーで、襲い掛かるシアゴーストを問題なく片付けていく。

3人が戦っているうちに、シアゴーストも30体近くはいたのだが、いつの間にか後5体ほどに減っていた。

王蛇も痺れを切らしたのか、ベノサーべルを一旦投げ捨て、カードデッキからカード一枚抜き、ベノバイザーに装填する。

音声がなり、王蛇の後方から契約モンスターの“ベノスネーカー”が出現する。

「ハアアアアアアアアアアアアアアア・・・！」

王蛇も地を這つたりして走り・・・

「ハアッ！！」

ベノスネーカーのいる後ろにバック宙する。そして・・・

ベノスネーカーの放つた溶解液を両足に纏い、高速の連続キック“ベノクラッシュ”を放つ。

直線上にいたシアゴースト達に見事炸裂し、一気に爆発を起します。

ゴルドはそう言つて、王蛇のように両手に持つていたスノウセイバーを一旦捨ててカードデッキからカードを抜き取る。そのカードにはデッキと同じペンギンの紋章が写されていた。

**FINAL VENT**

スノウバイザーに装填し音声が鳴ると、コルドの後方に霧が立ち始め、その中からペンギン型の契約モンスター“スノウフェザード”

が出現した。

スノウフェザードは残っているシアゴーストに向けて口から冷凍光線を放ち、それに当たったシアゴーストたちは瞬時に凍り付いてしまう。

「てやつー！」

コルドは一旦捨てたスノウセイバーを再び手に持ち、地面を仰向けになりながら滑つてくるスノウフェザードの背中に飛び乗る。

そしてコルドはそのまま凍ったシアゴーストたちの傍を通りながら、スノウセイバーで次々と一刀両断していく。これがコルドの必殺技“フローズンスライサー”である。

凍ったシアゴーストたちは身動きを取ることなく、スノウセイバーの餌食となり爆発していった。

「やつと片付いたか・・・」

アビスはシアゴーストたちが全滅したことを確認すると、その場を立ち去る。する。

しかし・・・

「オラアツー！」

「ツー？」

突然王蛇がベノサーべル振るつて襲い掛かってきた。

アビスは王蛇の攻撃をアビスセイバーで受け止める。

「祭りはまだ終わつてないつてか？ 浅倉」あさくら

「まだイライラが納まらねえんだ・・・少しは俺を楽しませりよ、  
二富」にのみや

そつこいつと王蛇は、アビスを無理やりなぎ倒す。

そしてアビスに向かつてベノサーべルを振り下ろそうとするが・・・

「団に乗るなつ！――！」

「ぐおつ！？」

アビスバイザーから水の衝撃波が発射され、王蛇は怯む。

その隙にアビスは素早く起き上がり、王蛇から離れるが・・・

「ハアツ！――！」

「ぐあつ！？」

突然アビスの背中に何かで切りつけられたような激痛が走る。

振り返るとスノウセイバーを手にしながらゴルドが対峙していた。

「ちい、大野木おおのぎい・・・・！」

「私も、このままサヨナラするつもりはありませんよ？」

アビスは体勢を立て直し、コルドを仮面越しから睨み付ける。

王蛇も同じく体勢を立て直し、再び構える。

「ハツハア・・・・そ�だ、それでいい。そ�でないと面白くない・・・  
・・・！」

「はあ～、こつちは大迷惑なんだがなあ・・・」

「よく無駄口をほざいてる余裕がありますね・・・」

3人は構える。

そして再び駆け出したその時・・・

キイイイイン・・・

「 「 「 ！？」」

突然謎の音が響き渡る。

3人は音のした方向へ振り返る。

そこにはあの小さな赤い宝石があつた。しかし何故か点滅している。

そして急に宝石が光りだした。

「なつ

」

「つあつ

」

「くつ

」

数分後・・・

その場所には誰もいなくなっていた。

アビスも、王蛇も、コルドも、あの赤い宝石も、みんな姿を消して

いた

「…………ん？」

アビスは田を覚まし、起き上がる。その隣には王蛇とコルドも倒れていた。

3人は今、どこかの工場跡地みたいなところにいた。

「…………だ、…………・・・？」

アビスはバツカルからカードテックを抜き取つて変身を解除し、  
二宮銳介の姿に戻つた。

「確か俺たち、廃ビルの中で戦つていたよな・・・」

「一宮は外に出でみる。

それと同時に一宮は呆気に取られた。外には高層ビルがたくさん並んでおり、明らかに自分たちのいた平凡な町とは違っていたからだ。

「…………どうなつてんだ？」

一宮は何故自分達がここにいるのか理解できなかつた。

自分はやつきましたミラーワールドで王蛇、コルドと戦つていたはず

なのだが、突然そこらに落ちていた赤い宝石が光りだしたと思ったら、いつの間にかここにいたのだ。しかも自分達がいたミリーワールド内の廃ビルで、工場跡地ではない。不思議に思うのは当然だろう。

「ん？」

「一富は足元にあの赤い宝石が落ちていることに気が付き、拾い上げる。

「まさかとは思うが・・・これの所為か？」

「一富が不思議に思つてゐる間にコルドと王蛇も起き上がった。

「あ・・・?ビリだ、リリは」

「現実の世界・・・ではないのですね」

王蛇もコルドも不思議そうに周りを見渡している。そして一富がいることに気付く。

「一富、リリはどうですか？私達はミラー・ワールドにいたんじゃないのかつたんですか？」

「さあな。俺だってわかんねえよ」

「一富がそう言い返すと王蛇とコルドはその場から立ち上がり、バックルからデッキを抜き取つて変身を解除し、浅倉威と大野木一雄の姿に戻つた。

「まつたく、今日は本当に不愉快な日ですねえ・・・」

「それは俺だつて一緒にだつての」

「お前、さきづぶせば、少しあはイラライラが取まるかもしないなあ……」

「富、「お前のイラライラを俺たちに押し付けんな」

「確かにそれはいい考え方かもしれませんね」

「お前もかい……」

言ひ合ひでいる中、大野木は「富の持つ赤い宝石に氣が付く。

「……その赤い宝石はなんですか？」

「あ？ああ、今ここで拾つたんだが、どうせさう俺たちにはこの一つの所為でこの場所にいるみたいだぜ」

「はあ？そんな宝石の所為で？……もつゞしまシな考えは……」

大野木が呆れ返るような言い方で話してみると……

キイイイイン……キイイイイン……

「 「 「 ! ! 」 」

突然頭に響く金切り音。それはつまり・・・

「モンスターか・・・」

「ちょうどいい、イライラが解消できそうだ」

「こんな見知らぬ場所にもいるんですね」

3人は近くの窓ガラスの前まで移動し、自身のカードデッキを突き出す。

すると3人の腰にバッклが出現する。

そして変身ポーズを取り、あの台詞を叫ぶ。

「 「 「 変身 ! ! ! 」 」

カードデッキをバッカルにはめ込み、一宮はアビス、浅倉は王蛇、大野木はコルドに変身した。

アビスは左手のアビスバイザーを2回撫で、王蛇は首の骨を「キゴ

キと鳴らし、コルドはスノウバイザेをぐるぐると持ち回す。

「さあて、いくか・・・」

「面倒だが、行くしかないか」

「邪魔になるような真似はしないでくださいよ、お二人さん」

3人は窓ガラスに近づき、ミラーワールドに突入した。

## プロローグ2 異世界（後書き）

「ゴールドの変身ポーズですが、単純に腕をクロスした形のつもりです。よければ想像してみてください。

では感想お待ちしています。

## キャラ + ライダー設定（前書き）

プロローグーでも予告していた通り、キャラとライダーの設定です。  
一回の設定も載せよつと思つたんですが、一回のキャラ設定は月光  
丸さんの方にもう記載されてるので、大野木だけにしておきます。

## キャラ + ライダー設定

大野木一雄 / 仮面ライダー・コルド  
おおのぎかずお

性別：男

年齢：38

髪型：黒髪のミディアムショート

好き：アイス、ケーキ（どちらも種類問わず）

嫌い：クズな人間（犯罪者、ヤンキーなど）

願い：死んだ家族の蘇生

詳細：仮面ライダー・コルドとして戦う男性。3人のライダーの中では最年長。職業は医者で、一宮たちの在住している町の病院に勤務している。学生の頃から武術に興味があり、医者となつた後もトレーニングを日々行っている。そのため一宮や浅倉と鬭い合える程、かなり腕は立つ。以前は妻と娘の3人暮らしでそれなりに幸せな暮らしを送っていたのだが、突然訪れた家族の死が原因でしばらくは悲しみに暮れていた。そんな時に神崎士郎と出会い、ライダーバトルの詳細を知り、自身も願いを叶えるために戦うことを決意。家族を生き返らせるために、どんな卑劣な手段も使ってでも戦いに生き残ろうとしている。だが医者という職業上、一宮たちと違つて人間の命を助けるという使命はライダーになつても守つている。なのでヤンキーや犯罪者といったクズな人間を主にモンスターの餌としている。仮に悪人を治療しても、隙を見てモンスターに襲わせて

いる。それでも自分の願い達成にとつて邪魔になりそうな相手は人間であつてもライダーであつても全く容赦しない。時と場合によつては善人を餌にすることも。コルドに変身した際はスノウバイザーを回転させる癖があり、敵を倒したり殺したりする場合は“凍れ”、“永年に眠れ”と口走る。一宮と同じく現在一人暮らし。

レリックによる次元転移で同じライダーである一宮、浅倉とともにミッドチルダに漂流する。

### 仮面ライダー・コルド

大野木一雄が変身する仮面ライダー。ペンギンのモンスターと契約している。カードデッキは群青色。顔の部分はペンギンの頭、肩のパーツは翼、胸部の鎧は胴体と足をイメージさせた意匠を持つている。それ以外はアビスや王蛇と同じスペックを保っている他、実力も2人と同等なレベルを誇る。

手に持つ大きな槍型の召喚機“スノウバイザー”にカードを装填することで、各カードの持つ力を駆使することができる他、武器そのものとしても有効に使うことも可能。ちなみにカードを装填せる場所は槍の下のほうに装備されてある。

### スノウフェザード

コルドが契約したペンギン型のミラーモンスター。召喚する時は霧が立ち、その中から出現する。基本仰向けになつて滑りながら移動する。氷のない場所でも、まるで氷の上を滑っているかのように素早く動きまわることができる。ただし一足歩行による移動はあまり

早くない。両腕には鋭利な刃物が装備されており、口からは冷凍光線や氷の塊を発射することができる。アドベントでは、立ちながら

敵に向けて冷凍光線を放つ。

嘴が鋭く、コンクリートにも容易く穴を開けてしまう。人間を襲う際はその嘴で体を貫いて命を奪い、捕食する。

AP 5000。

### ソードベント

スノウフェザードの両腕を模した大剣“スノウセイバー”を2本召喚する。かなりの大きさだが、コルドは軽々と操っている。

AP 3000。

### ストライクベント

コルドの頭部の形をした武器“スノウクローラー”を召喚する。左手に装備し、発射口から鋭利に尖った氷の塊を勢いよく飛ばす。アビスと同じく攻撃は単体で行う。

AP 3000。

### ファイナルベント

止めを刺すときに使用するカード。スノウフェザードが冷凍光線を放ち、相手を凍らせる。その後コルドがスノウフェザードの背中に

飛び乗り、スノウセイバーで凍つた相手を一刀両断する“フローズンスライサー”を発動する。

AP5000。

ストーリーが進み次第、更新する予定です。

## キャラ + ライダー設定（後書き）

「ゴールドのイメージ図がはつきりしなくてすみません。

ちなみに大野木が勤務している病院は龍騎の原作の10話で北岡に依頼した女の子のお母さんが入院していた病院のつもりです。

## 第一話 ハンカウント（前書き）

ようやく本編です。

## 第一話 ハンカウント

アビス・王蛇・コルドの3人がミラーワールドに突入してから数分後・・・

「ねえ、フュイトちゃん。ここだよね、次元震が発生した場所つて・  
・」

「うん、そのはずなんだけど・・・」

先ほどまで一宮たちがいたミッドチルダの工場跡地に一人の女性が来て、何かを調査している。

二人のうちの一人はこの世界を中心に組織された、時空管理局のひとつ機動六課に所属するスターズの隊長である高町なのは、もう一人は同じく機動六課所属のライトニングの隊長、フュイト・T・ハラオウンである。

現在一人は工場跡地で次元震が発生したという情報を聞き、ここまで飛んできたのだ。

しかし、一人が工場跡地に来ても、そこには何もなかつた。現にこの場所に漂流した人物達はとっくにどこかへ行つてしまつたということは当然ながら一人が知るわけもない。

「何も無いね」

『「ううん、ひょっとしたら何かあるかもしない。もう少し調べてみよう』

「うん、わかった」

二人が調査を再開しようとしたその時、突然通信が入った。

「はい、こちらの『なのはさん！大変です！』ス、スバル！？  
どうしたのそんなに慌てて・・・」

通信した相手はなのはと同じくスターズのメンバーで、自分の教え子の一人でもあるスバル・ナカジマであった。

『今さっき全てのガジェットを倒し終えたんですけど、突然建物の窓から大きなクモが現れたんです！』

「窓から大きなクモが！？」

『襲つてきたので反撃したんですが、全く歯が立たないんです。だからこいつ今まで応援に・・ティア！！』

通信の途中でスバルが大声を上げる。

「どうしたのスバル！？」

『ティアがクモに捕まつたんですね！なのはさん早く来てください！  
それまで私も頑張りますから！！』

「わかったよ、今すぐそっちへ行くね！」

なのはは通信を切ると、ふわりと浮かび上がる。

「フヒイトちゃん、スバルたちが危ないみたいなの。私応援に行つてくるね！－！」

「うん、私もすぐに行くから！」

そういうのほかなりのスピードでその場から飛び去つていった。

しかし、まさかなのはが到着した頃には、その応援が無駄になると「う」とは思いつきもしなかった。

時はスバルがなのはに通信を入れる数十分前に遡る・・・

「ギシャアアアアアア！」

「つかー！？」

「ちー、イラつかせる・・・！」

「虫の分際で、抵抗しないでもらいたいね！」

ミラーワールドに突入したアビスたちは、クモ型のミラーモンスター

—“デイスパイダー”と戦っていた。

しかしデイスパイダーは前足を使って攻撃したり、クモの糸を吐いたりして三人を見てござらせていた。

「ホントにめんどくさい奴が現れたよな・・・おつとーー。」

アビスはデイスパイダーの攻撃を避け、その場から大きく離れる。そしてある程度離れた後、カードデッキから一枚のカードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

### 『STRIKE VENT』

アビスの右手に、アビスラッシャーの頭部を模した手甲アビスクローイガ装着された。

「ハアツ！！」

そしてアビスクローをデイスパイダーに向けて、高圧水流を発射する。

デイスパイダーはその水流に弾き飛ばされ、大きくひっくり返った。

「邪魔をするな。こいつは俺の獲物だ」

「あなたの獲物だといつ決まつたんですか？」

「早い者勝ちなんだよ」

こんな時でも3人は言い合つ余裕があるらしい。

しかしそうしている間にディスパイダーは起き上がり、ビルの壁を登り何処かへ逃げ出した。

「ちつ、逃げる気か！？」

「逃がすかよ・・・！」

3人はディスパイダーの後を追つた。

一方、ミッドチルダの街中でも、とある戦いが繰り広げられていた。

「スバル、一気に決めるわよ！！」

「うん！！」

機動六課のスターズ3であり、物語の冒頭あたりで声だけ登場したスバル・ナカジマと、同じくスターズ4のティアナ・ランスターの二人が、機械兵器のガジェット相手に戦っている。

迫り来るガジェットをスバルがマッハキャリバーで殴り飛ばし、離れたところからティアナが遠距離にいるガジェットをクロスミラー ジュで打ち落とす。

二人の奮闘もあって、ガジェットも残り後一機になった。

「これで・・・最後つ！！」

そして最後の一機をスバルが破壊し、  
ガジエットは全滅した。

「ふう、せこと片付いたね」

「新編 金瓶梅」

スバル - うん！」

2人が移動しようとしたその時

ノンノ

卷之三

突然ビルの窓ガラスの中から、逃げ出したティースバイターが出現した。

な、何がいいつ！？

うわわわ！！！ ケ、ケモ！？

ディスパイダーの出現に慌てる2人だが、ディスパイダーはそんな事もお構いなしに2人に攻撃を仕掛けってきた。

「うわあっ！？攻撃してきた！？」

「くつ、いきなり何なの！？」  
スバル、こうなつたら「コイツも倒す  
わよー！」

「ええっ、戦うのー? だってクモだよー?」

「ああもう、グチグチ言わない！！ いくわよーーー！」

2人は焦りながらも、ディスペイダーに攻撃を仕掛ける。

「クロスファイアー・・・シユートー・・・」

ティアナがデイスパイダーを狙い撃つが・・・

(ツ！？ あまり効いてない！？)

ディスペイダーはあまりダメージを受けていなかつた。それもそのはず、ディスペイダーはミッドチルダとは別の世界から来たのだ。ましてやライダーによる攻撃しか手応えが無いモンスターにスバルたちの攻撃などあまり効果が無いのだ。

「まずいわね・・・スバル、なのはさんに応援に来るよう知らせ

「わかつた！！」

ティアナにそう言われ、スバルはなのはに通信を入れる。

だが、その隙をデイスパイダーは見逃さない。口から糸を吐いて、ティアナを捕まる。

「キャアッ！？」

「ティアー！？」

気が付いた時には遅く、糸に絡まつたティアナは下に落とする。

そこにデイスパイダーがゆづくりと迫る。

「（うそ・・・）のままじゃ私、食べられるー？）いや、来ないで・  
・・・！」

ティアナは必死にもがくが、糸は全く千切れない。

「ティアを離せ！！」

通信を終えたスバルがデイスパイダーに突撃するが・・・

「ギシャアアアアアッ！！」

「キャアッ！？」

デイスパイダーに弾かれ、吹き飛ばされてしまつ。

ついにデイスパイダーはティアナの田の前まで来た。

「ティアッ！－！」

もう間に合わない。

そしてティアナが食べられそうになつたその時・・・

キュイイイイイイイン

ビルの窓ガラスから三台のライドショーターが飛び出し・・・

「ギシャアアアアアアアツ！？」

そのうちの一台がデイスパイダーを跳ね飛ばした。

三台のライドショーターはスバルの近くに止まる。

卷之三

スバルもティアナも呆気にとられた。

やれやれ、左手がこんなんだから運転が不便だな」

「ハツ、今に始まつたことじやないだろ」

「あつたくですね」

ライドショーターの中から、アビス・王蛇・ゴルドの三人が出てきた。

そして、ディスペイダーに言い放つ。

「ああ、祭りの続きをしようつか……！」

「お前も沈めてやろうか……？」

「もうもう眠つてもうこまよ……」

最凶最悪の仮面ライダーが三人、ミッドチルダに参上した。

## 第一話 ハンカウント（後書き）

ミラー・モンスター以外はセリフに名前を入れるようにしてましたが、なんだか読みにくううなので名前を入れるのはやめておきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2956ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~3人の最凶~

2012年1月10日21時46分発行